



Title	アメリカ國語教育の傾向
Author(s)	八木, 穀
Citation	語文. 1950, 1, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68365">https://hdl.handle.net/11094/68365</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# アメリカ國語教育の傾向

## 八 木 級

### はしがき

私は現在日本の教育がその実質はともかくとして、その制度・形式が殆んどアメリカの影響下（註1）に改変されてきた事実にかんがみ、かの國の國語教育が如何なる基盤の上に、如何なる方法で行われているかを知ることによつて何をわれわれは當面緊急の問題としなければならぬかを考えてみなければならぬと思ふのである。

私がこれまで教科書として用いた國語教科書は、『English Language Literature, Writing, Reading, Spelling, Speaking, Language』などを含んでおるものとして考えてゆきたい。資料は一二三を除いて、よく最近のものばかりといらわけにゆかなかつたのは残念であるが、大勢の把握を目的とする本稿では許して頂きたい。記述の中を中等教育におくつもありながら、その前後の初等・高等教育にも若干紹介の筆が及ぶ筈である。

### I アメリカ國語教育の環境

コトバは元來人間の社会生活に随伴して発生し、発展し、存在するものであるが故に一つの國におけるコトバ、即ち國語に関する教育の環境は必然に時間的・空間的、伝統的・社会的な場において生

きているものとして考えられなければならないと思ふ。そらした見地は立ててアメリカの國語教育の環境を考慮する時次のよつたことがいふらるであろう。

第一に、アメリカ連邦の成員は人種的に多様であり、この國における教育の特色の一つが、國民をアメリカナイズ（Americanize）することにある、そこでは國語としての英語が重んぜられているのはいづまでもない。その例として、カーネギーのカリキュラムを見ても下表の

如く國語の單元が尊重され、じるようだし、また連邦教育局発行の「U.S.A.の教育」（註2）をみても全米四十九市の中学校十七教科目中時間数からいつて國語関係

高等学校カリキュラム	オハイオ
ノース・カロライナ (学科)	(学科)
国語 (単位)	3
数学	2
社会科学	2
外國語	2
選択	4
	16

参照：“Curriculum principles & Social trends” Gwynn, John Minor PP. 337-8 1945

ノース・カロライナ (学科)	オハイオ (学科)
国語	4
数学	2
社会科学	2
外國語	2
選択	4
	16

○三時、綴字 (Spelling) 五九八時、英習字 (Penmanship) 五六七時、計四五八五時となり、全教科時数一一九三四時に対し三八ペーセントを占めているのである。

第二に、アメリカの社會思想は独立宣言 (註3) に淵源すると見られるのであるが、そこにある個人主義は、社會を前提としたものであり、従つて、教育が負わされる個人の人格完成も、そういう意味におけるものであり、社會的な感覺を獲得することを彼らはまず要求されるのである。このことは「シユニア・カレッジにおける英語」(註4) が個人的な單元である創作や、自主的な讀書においてさえ、グループ方式を要求しているところにうかがえるし、それはまた、右の主張がさらについよう、「話し方や、現代文学の當面する問題でもあり、社會的理窟の問題」でもある。アメリカ民主主義は個人々々の社會的人間的自覺に出発しなければならない。かかる社會を背景としての國語教育において、文學の重んぜられるのは当然である。ゴッショ氏の「シユニア・カレッジにおける英文学」(註5) は五十二のシユニア・カレッジの觀察の結果、英語科教授の諸問題を取り上げ殆んどのシユニア・カレッジでは事実全新入生が文學コースを取つてゐることを示すと共に、そのコースに対する興味、目的、テキスト、方法の設定を通じて如何にしてこのコースをコムミニティ・ニードに適合させるか、といふ問題が報告されているのである。別な論者 (註6) はまた、「言語學科がわれわれの社會生活の要求に十分合致せねばならぬ」ということを知るは英語教師の責任である。ともいつてよい。

第三に、人間性の理解に深きを求めるアメリカのヒューマニズムは、個人の市民的人格の全一的完成を前提とする点において、ファ

シズムの「人民のための社會」とその出発点を異にしている。民主主義的市民は現實を理解し、天才的作家の、すぐれて精妙な感覺や、高邁な思索の後を辿り、時代と社會の絶えざる要求である市民的市民を創り出す手段として考へられている。それ故、卒業後上級に進学せずにすぐ社會生活に入る所謂ターミナル・スクウデンとのために、それがたどり航空学生であつても殆んどのカレッジは文學のコースを開いているのである。(註7)

第四に、地方分権の伝統であるカリキュラムの構成は、一應 Bureau of Education (連邦教育局) によつて National Planning がたてられても、各州毎、各自治体毎に、その属する地域社會の要求に応じ、カリキュラムの目的設定委員会や、構成委員会 (例えば「現代語研究会 Modern Language Study の如き) によつて各グレイドを通じての一貫的カリキュラムが作られる。右の現代語研究会は一九二三年につくられて、現代語カリキュラムの作成に着手したのであつたが、その実行委員は (大学教授十八名、ハイ・スクール教師六名、州教育局一名) 廿五名であつた。(註8) このようにして歐伝來のアカデミック・スクールからコムミニティ・スクールへの転換が漸次行われてきたようである。(註9) それは学校立地の地域的 requirement を十分しんやくしつつ、學校の運営をはからねばならないという考えに立つのである。

第五に、最近數十年の教育思潮の新傾向も、右の如き動きの力となり、環境としてはたらいている。本來の人本主義思想に、現在主義思想が止揚され、プラグマティズムの哲学者と、それを教育思想に反映させた經驗主義教育学者バーカー、デューイーがでて、經

驗の尊重、生活學習の提倡があつてからは、生活現象を第一義的に考へる英國流のリベラルアーツ・カレッジの存在や学科カリキュラムを、その根柢から動搖させ、教育の根本問題に深刻な反省をなさしめた。その結果、當然、特に低いグレイドのカリキュラム構成に社会學習が中心として取上げられた。そこにおいて中心的な位置を占めておるのは、われわれの觀念である社会科というよりはむしろ、実用化され、生活化された國語科であるといった方が妥当である。そのことは現代語教育としての English が依然として諸教科の第一位として尊重されているのによつても知ることが可能である。

即ち、連邦教育局一九一八年の報告書 (Cardinal Principles of Secondary Education) においても中等教育の七ヶ條の目的中、第一條に基盤学科の習得として、「生活上必須の基礎学科を修得せしめ、特に國語に熟達せしめる」と記してある。

アメリカにおける國語教育の環境は要するに、民主主義的な、しかも一種の國家主義によつて多彩に色どられているといえよう。そこには極めて積極進取のフロンティア・スピリットの躍動も、ブューリタニカルな敬虔嚴正への志向も見られるであろう。所謂コア・カリキュラムがフロンティア地方に計画され、試みられたに止まるのによつてみても、育つものと環境との相関の面白さがうかがえるのではないかと思われる。次に学校教育の中核をなす中等教育がこの國においてどのような原理と目標をもつてゐるかを一瞥してみよう。

## II 中等教育の原理と目標

アメリカの國語教育が如何なる一般的環境の中にあるかは右に述

べたが、かかる環境的現実から、どのような目標がうち樹てられたかを知ることが必要である。つまり國語教育の目標も、そのような一般的な理論的な分析の過程に浮び出てくるものであり、技術的、実際的な総合・統一の過程において実施されるのである。私はここではまず分析的に教育目標を追求し、次章において國語教育が如何に総合統一をめざした実学となつてゐるかをしらべてみたいと思ふ。

### (1) 中等教育の目標と、その基礎

教育における目的分析の鍵は、人々の實際生活における現実と、社會的約束との分析に見出されるべきである。それ故に、教育の一部門としての中等教育の目的は、個人が平常にかゝわりあつてゐる現実と、そこにおいての約束との實際面に注意が向けられ、解釈が導かれて設定されるのでなければならない。その解釈は固定的なものではないし、またそらはありえないと考えられる。つまり社會が異り、時代が異れば当然、その解釈や結論は変らねばならぬものであり、明らかに対象となる世代が違い、そのグループが違えば、違った行動、違った方法、違った差等がある筈である。対象の完全な行動分析は、その中に異つた個人、異つたグループのもつ偏向——人間生活の多様に涉る狀態——のすべてを包含することである。勿論、このような細目列挙的な分析は不可能であろうし、もしまだかりにそれが出来たとしても、問題的價値があるに過ぎぬというに止まり、明日の存在を予言しがたい個人を、範疇のどこかに位置せしめるに過ぎないであらう。けれども行動の一般的分野は、實際面において何らかの方法、何らかの段階にすべての個人を位置せしめ、現實の原理的な分析を可能ならしめることによつて、中等

教育の基礎的目標を設定しようとしてきたのである。

### (2) 中等教育の三つの基礎目標

この國における教育の対象は、いさまでなく個性 (Personality) であるが、教育の場においてその活動的な三つの面を捉え、その円満なる発達に導こうとしているのである。即ち、個人の生活を①市民の義務に参加し、共同社会生活の経済に何らかの関係をもつこと。②経済的効用に関する生産と分配にあずかること。③相対的自由と個人の独立的生活。といった三つの方面に分ち考えるところから、次のような三つの基礎目標が指定されるのである。

- A 次代の市民として、また社会の協力的な成員としての独立準備

#### ——社会的市民的目標

- B 次代の勤労者、生産者としての独立準備

#### ——経済的職業的目標

- C 次第に複雑化してゆく個人的な活動や、時間の活用、個性の発達などが社会的に重大意義があり、それらの諸活動に対する個人的な準備

#### ——個人的職業的目標

これらの三つの目標は相互に矛盾しないだけではなく、むしろ高

度に高い結び、高い依りしてゆくべきものであることが認識されな

くてはならない。之は個人において統一され、綜合され、最も広い意味での、中等教育の社会的目的を構成する。社会の単位としてある個人は、同時に市民であり、勤労者であり、相対的に独立せる個性である。その生活における三つの面は、切り離せないし、中等教育に於て、生活の三つの面のどれか一つのための準備が軽んぜられるといふこともあつてはならないのである。

中等教育の三つの目標が各個独立でないばかりか、むしろ内的関

連があり、相互依存である」と、それらが各個人を関係づけている。生活の三つの相異なる面を表わすこととは右に述べた通りである。歴史的にみるとその目標のどれか一つが無視されるとか、他より價值低く見るよう主張されたために却つて、右の三つの目標の内的関連の必要性は正しく認識されてきたようである。それ故この國におけるどれか一つの目標の無視とか、注意の不足とかが、教育史的な反省によつて認識されおおし、却つて現在ではその強調し過ちの懸念さえあるとまでいわれている。(註10) かくて、個人的職業的目標は過去においてそれが果たすべきだつた以上の過分の扱いさえ受けた。教育学の立場からする客観的分析の結果、三つの目標を夫々に一度は分離したとしても、個人の生活活動の三つの形式の全一化のために十分な用意を怠つた中等教育は、満足なものとして考えられていないのである。かくて生徒の将来と、現実の社会を前提とするカリキュラムの中で、國語の習得は極めて實際的基礎的な諸能力を引き出すことを目標とするのは之亦当然である。

### III アメリカ國語教育の実際

#### ——初等・中等教育を中心として

アメリカの中等教育は現在に到るまで凡そ次の三段階の発達をとげてきた(註11)。この國がまだ植民地であつた十六世紀から十七世紀にかけて、ヨオロッパの伝統そのままのラテン・グラマ・スクリルが設けられ、排他的なラテン、ギリシャの古典語の教育が主として行われた。ついで十八世紀の中葉にいたり、より大衆的な、完成教育を考慮するアカデミイが過渡的な形態をとつて現れた。そして十九世紀初め(1824) Boston English Classical School が Boston

English High School と改称して、高等教育 Higher Education の準備より完成教育を主として取り上げた。以後カレッジのカリキュラムは漸次高等学校のそれに近づいて、進学者に対する特殊な、準備専門コースだけを目標におく学校の必要もなくなつた。(註12)

現在アメリカの学校制度は州によつて学校によつて異なるため、いちがいにはいえなくじつめ、大体次の如くである。(註13)

### 初等教育 Elementary Education

#### Pre-Primary School

(幼稚園 Kindergarten)

小学校 Primary School

中等教育 Secondary Education

中学校 Junior High School

高等学校 Senior High School

専攻科 Junior College

### 高等教育 Higher Education (Terminal and Professional)

#### (1) 初等教育における国語

從來行われてゐた入門期の教育方法に、アルファベット法 (Alphabet method)、單語法 (Word method)、音韻法 (Phonic method)、文章法 (Sentence method)、物語法 (Story method)などがあつた。(註14) これらの方法はすでに古くとされてゐるが、教師を中心とし、個から全く、観念から現実への方向をもつて、わが國においても中学校などで、会話から英語の入門を導いてゆく場合、之の方法が多くとられてゐるようである。

ところがこの三四十年來、教育心理学が急速に発達し、教師中心

部分本位の学習指導法が批判され、まず学習の対象となるべきは、部分よりも全体、單語よりも文であり、基礎的な部分は全体の中の部分として、抽象化しない生きた部分として、全体の理解の後に部分をほどしてゆこうとされたのである。この新しい初步入門期の学習指導には、所謂視・聴覚的要素が非常に多くとり入れられコトバの学習が総合的、生活的に行われ、全体を重んじながら部分を軽視しない方法がとられている。私はいま記述上の順序を整えるため、初等教育初期、はじめてコトバの集團的教育をうける幼児学校の学習指導法から逐次上級のそれについて略述してゆきたいと思ふ。

最近、從來の幼稚園の下へ更に1年の教育期間を設け、それらを通じて幼児学校となる、その期間に使う教科書をプリ・プライマー (Pre-Primer) とする。トリ・プライマーのガイドブック (註15)によれば、「読み方」の指導は、次の六段階に分けて考えられる。

1、読書準備の段階、これは幼稚園か、小学校第一学年の初期かと用意されるのが普通で、「読み方前の段階」 (Pre-reading stage) である。

2、「読み方」学習の最初の段階、いじりでは生徒が「読み方」における興味を多くし、書かれたもの、印刷されたコトバが彼らに告げる意味を明らかにしようとする欲求をもつ、六〇或はそれ以上のコトバを通じての視野を開く。

3、生徒たちが継続的、且つ有意義に簡単な朗誦をするこ。及び教わらないで独立した「読み方」に興味をもつて至る段階。これらの目的 (goal) はつねに最初の学年の終り或は第一学年の

はじめに達成される。

4、急速な成長に伴つて、流暢な、正確な音読 (oral reading) のやあら習慣と、黙読 (silent reading) はよひ、明確に意味の理解のなされるような根本的な身構 (basic attitude) のやあら段階。この段階は第一学年と第三学年において典型的に生ずる。

5、経験が急速に拡張し、そして読書の増大した実力が獲得される段階。かゝる成長は普通第四、五及六学年の頃、生ずるものである。

6、読書の興味と、その習慣、その趣味の洗練されてくる段階。

かゝる発達過程は中学校 (Junior high school) 高等学校 (senior high school) 及び大学 (college) の時代に見られる。

読書を学ぶ子供たちの発達に対する注意がい研究は、右の如く彼らが実力ある読書家となつてゆくのに幾つの段階を通り越してゆくものであることを示していく。発達の一阶段は読書に関する興味、態度、習慣における成長 (の持続的) 過程の一齣としてまず現状を考える。けれども、成長の種類は大なり小なりの程度で、どこかで重なりあつて発達してゆくところに見られるのである。だから、或る段階において第何学年といら風に概念的には同一化してみても、生徒の一人一人は異つた成長をしており、それに対して技術的に、或はまた生徒の要求によつて、彼らを個性化してゆくということは可能である。

前記の発達段階 (grade level) の画一的な標準に合致しない子供たちの多くある事も亦事実である。彼らは示された段階より早く習得していくたり、また或る種の子供達は「読み方」の種々なる局

面での発達をとげるために、他の子供達よりもずっと長い間にわたり指導を必要とするこも考えられるのである。

ところで「読み方」の基礎的な教育の目標をどうにおいていいか、またそれが何を達成しようと志向しているかを知る必要がある。すべての読書活動のめざすより広い目標をまず、生徒の経験を拡げ、さらに認識を深め、興味を広め、望ましい態度を涵養し、適切妥当な思想に導き、最後に、豊かで安定した個性の発達を可能なならしめる処におこうと考えられているのである。そして「読み方」の基礎的な教育が個性化されるために、次のよしな特殊な目標を設ければならないとするのである。

1、読書するとじらうとに強い興味をよびさまし、効果的な読書

法を学ぼうと強く願うように刺戟する」と。

2、音読、黙読の両者によつて正しい認識の習慣をきちんと発達させること。

3、読んでゆく文の意味を明晰かつ正確に解釈する能力を発達させる。

4、読書を通じて獲得された観念に対しても批判的な反省 (reacting) をする習慣や、又その観念を新しい事態に再構成したり、応用したりする習慣を発達させる。

5、効果的に朗読する能力を涵養する。

6、さまざまな読書を通じて、永続的な興味と、そぞらう読書に対する強い動機とを涵養する。

7、書物の選択においてその標準と趣味とを向上させる」と。  
之の目標が達せられたならば、生徒の物を見る力は向上し、より豊かで、より意義深い読書家となり、社会能力も伸ばし、一般教養

もより広くし、現代生活をより立派なものにする事柄に對しての評價力を働かして、生徒をすぐれた個性をもつ社会人となさしめらるゝと考えるのである。之らの事はまた眞理の探求に測り知れない程の奉仕もするし、有効な読書の習慣は個人的発達をいよいよ助長し、ひいては社会全体の進歩をさえ保証するに至るのだという点で重大性があるといふのである。

かかる見通しのもとに、入門期の子供たちに対する観察と経験の結果、少くとも「読み方」練習の三つの心得がその急速な発達を促進する上に必要な方法であるということを示している。即ち、

1、「読み方」の基本的指導が注意ぶかくプランされるといふこと。

2、色々異つた内容をもつ教材で「読み方」活動を持続的に指導してゆくといふこと。

3、クラスルーム、図書館、家庭などにおいて、指導されての読書と、自由な娛樂的な読書とを問わず、それらのための広い用意をしてやること。

之らの基礎的な三つの事柄のうち、どの一つの用意にしても、怠ることがあれば生徒の興味、読書の態度、読書の習慣を無力なものにぶちこわしてアラうことになる。

ところでアリ・ブライマーの子供たちを扱う良き教師のすべてが基本とすべき目標は、知的で、社会的で、道徳的で、情操的な少年少女の発達成長を促進助長し、彼らの身体的福祉を増進し、安定性のある個性の発達を図るといふ点におかれているようだし、こうした努力は子供達の体験を拡張し、よき考え方(good thinking)を刺戟し、そして彼らの興味を日々ひろげてゆくといふ風に考えられ

ている。そのためには次の諸点に留意しなければならないのである。

1、子供達は、教師が物語りをし、又は興味ぶかい一くさりの話をしている間、「心にきき耳をたてる」。

2、子供達は、その学んでいる事柄に関連してもつと理解を深めるために満足に連れてでると、ほんとうに注意ぶかく観察する。

3、子供達は、ラジオを聞く時、興味ある物語を好み、また價值ある報道を得ようと/or>する。

4、子供達は、映画を見れば、スクリーンに現れてくるストオリイを熱心に追う。

5、子供達は、絵画や、地図や、その他学習のための視覚的教材から多くを学ぶ。

6、子供達は、レクリエーションのためと、また彼らの課題に答えるを見出すために、努力して広く読む。

こうした風な実践を通して、子供達は新しい洞察力、より広い興味、追求する態度、健康的な眺望などを要求しうるようになつてくる。かくて注意ぶかくプランされたガイダンスの結果として子供達はその見、聞き、読み、そしてそれに対し批判するに至る。といふ風に、すべてを「理解の可能性」へと急速に発展してゆくのである。

このアリ・ブライマーの段階から、いのよりにしてあたえられた巾広い基礎は、爾後の発達における各段階に價値と変化のある諸経験をもたらすのである。

アリ・ブライマーにおけるプランの中にも勿論、ヴォキヤブラリイのテストがしばへ織り込まれることは今までもないが、正しいコトバは言葉遊び(Language games)や、図形や、その他のア

タショソを通じて樂へるゝ自然に學ばれるやうで、例えは「一クブックのあら真を開く」、そりばお父やんじん男と、お母やんじん女と、その子供ふじぶ赤ふやんのトロハイルがねひ、その夫々の絵の横に、Mother, Baby, Father など三つの單語が書かれており、子供達は前の頁にぬいたお父やんの絵に、Father お母やんの絵には Mother 赤ふやんの絵には Baby ぬいたのを思ひ出し、同じ單語を指摘する。ところ風にして單語をマスターしてゆくのやあ。それらが進むにつれて、新しい單語が増加していくが、やがて必ず文本位に、全体から部分へ、具体から抽象へ、單純なる複雑へと導かれてゆくのやあ。だんだん work, play が I, blue, yellow, red, see, come, go, up, down などの單語がファーブル・パロ・トライヤーと並んで、やがては・パロ・トライヤーと並んで my, make, big, little, in, to, away, help などは、トロベード指摘の中心に出てゆく。Come to me. など It is in the car. O to や in など、やれやめ も it など、どう関係してゐるか、などを考へさせたりもある。また上段・中段・下段の並ぶ四欄に、玩具の兔、皿、本が夫々各段に置かれている。それが何處にあるかをはつきりとトロベード指摘せせるのである。それは top, middle, bottom などした空間的な概念を発達せしめたために初期に設けられた課業の例である。

小学校で使つた教科書の一例として、William H. Harris の First Reader の第一頁を開いてみよう。おや口絆は、マルシャ猫がある。右側に、a cat my cat the cat ある。冠詞や代名詞領格の限定機能を認識せしむるの右側頁には、猫が風をくわえて、大図が示され、その下に Has a cat a

rat? The cat has the rat. など問題を出しそう。The cat a rat など冠詞の使用に注意を取れて、次の頁では rat, r-at, rat と單語の分解→綜合によつてペペラングの基礎的な注意がなれてしまう。やつと進んでいくと、スマッシュとサウンドとの関係を mit mate, pin pane, can cane, cap cape などによつて注意を促したりする。しかしわざ表記・発音などに限らず細かい注意はセカンド・リーダーに入つても根気よく継続され、物語に入る前に新出單語の發音を示してある所もあれば、物語の後に出ていた單語中、其の注意をくわめるの木の如くに説明してある。

W tried to blow out the candle, and said, "oo," but he could not do it.

H said "I will blow it"; but the light would not go out.  
"Let us try to blow it together," they said, and out went the candle.

why when white where what who which

このものに發音とスペリングとの間に不規則な溝の多い英語では低学年から特にスペリング教育に力がそゝがれるのである。最近の進歩的学習指導法ではスペリング教育の目標を子供の表現欲と関連づけて、子供が書きたがる事柄を間違いなく正しく導いてやくと心に傾向があつて、スペリングの規則や、用語例を課すのは田畠なりより併用すべき方法と見られるに至つておる。なんでもいい。(註1)文法も從來の文法書の方法—術語の定義・法則などを何かの体系で授け、その法則に因した用語例や練習題を課すといふことは生きたコトバの理解のためよりは、文法を文法として形式的に扱うためになされたといふののために切实に反省されて

比較的新しい教科書(註17)では文法教育の目的を

1、文を正確に話しかけ書ける上へ

2、種々効果ある文をいくれる上へ

3、句読法を正確にである上へ

4、書かれたべしらかの内容を取出せん上へ

子供達を助けてやる處におるのだと云ふ。しかし、小学校では専門的分化をせずに種々な教材が織り込まれ、所謂「読み方」

だけではなく、高学年になると實際的な要素が多くなり下へ

る。例えば Good English oral and written (註18) の第五学年の

所を開くとみると Words in a Series の章に

See, Saw, Seen

の動詞変化が列挙せらる。

See and sees are used to express present time. Saw is used to express past time. Seen is used with have, has, had, is, are, was, were, etc.

山海堂の文法的説明の書(註19)の次の断片 picture study が載場は大頭立の牡牛が描かれていて、結構どうぞ。What do you see in above the picture? What are the oxen doing? How do you think oxen compare with horses?

(a) I strength? (b) In speed? 作文には「この総ふる體形わざる物語が讀む」 あるのである。その次の章は人物伝、更上次の次には Letter writing の章があり、友人に出で手紙の書き方、表書の仕方などが説明され、H. L. Shantz がつづる。その後の次には文学の読み物がある。第六学年ではまた実用書翰(Business letter)が入る。これが國の整理と統一のためか、

いた教科書は、その編纂の意識は強くなり、ややこしくなるのである。教科書は、よりよくな体裁をなしてしまふ、巻尾に構造的な頁数を割いて、その概括(Summary)がなされ、用語解(Glossary)が字書の如くに施され、索引(Index)が整備され、さらに追加附錄(Appendix)が、能率的に使用されるべく分類されたものである。(註1次項)

註1 日本教育年鑑、山海堂一九四九年版。「教育使節団報告書」一九四六年三月、その他一九四五五年一〇月以後數次のO.H.Q. C.I.E. 指令などを参照。

註2 "Education in the United States of America"; Bureau of Education, 1927

註3 "A Short History of the United States"; Bassett, John Spencer p. 186

註4 "English in the Junior College"; Cook, Alice Rice: Junior College Journal, 3: 313-3 1933

註5 "English Literature in Junior Colleges"; Goshch, Marcella: Junior College Journal, 10: 194-9 1939

註6 "The place of English in Junior College"; LaBrant, Lou: English Journal, 29: 356-65 1940

註7 "English Course for the Terminal Student"; Stone, Helen M.: Junior College Journal, 10: 85 1939

註8 「英語キヤウト」 中国流傳 聖川

註9 "Early Academy and College"; Alexander Inglis 1918

註10 "The interrelation of the Three Aim" 聖川

註11 "Secondary Education for American Democracy", Wrinkle, William L. p. 125 1942

- 註12 「トマホークの國語教育」平井昭夫 著[1]英  
註13 “Principles of Secondary Education” 正木  
註14 「トマホーク」の國語教科書」平井昭夫 著[1]英  
註15 “Guide book for the Pre-Primer Program of the Basic Readers” : William S. Gray & Lilian Gray 1940

- 註16 “A Basic Writing Vocabulary” : Horn R. Univ of Iowa 1926  
註17 “Junior English in action” V. III Tressler, J. C. 1941  
註18 “Good English-oral and written”; William H. Elson & Clara E. Lynch 1940